

朝の日差しが差し込む宿舎の廊下を、少年たちは急いだ。
学園指定の半袖半ズボンの制服を身に纏い、ひざ下まである白いソックスを穿いて。
今日は『あれ』の日だ。
古びた木の床をきいきい言わせながら、少年たちが一様に『検査室』へ吸い込まれていく。

少年たちだけが通う全寮制の学園。
誰がどのような私財を以って建てたかは全くの謎に包まれているが、ここでは日々ある目的のために少年たちを『教育』していた一。

少年たちの卒業後の進路は、この学園に入った時点で決定されている。
ある者は上級貴族の家に、ある者は遠国の政治家の元へ。
皆一様に性奴隷として売られていった。

この学園を卒業しているということは、一通りの『教育』が済んでいるということの保証でもある。金に糸目をつけない購入者たちはそのブランドにこだわりを持つ者がとかく多かった。
学園に入学させられる少年たちの容姿は端麗なものが多い。
選び抜かれた子羊たちがこの森の奥地で日夜躰を拓かれていることなど、世間の人々は知るよしもない一。

少年たちが『検査室』に入ると、待っていた教師達に着ていた半ズボンのチャックを開けるよう指示された。教師たちの命令は絶対だ。
少年たちは誰一人として喋らず、言われた通りにする。

チャックの間から幼茎を取り出すよう言われ、そこに桃色がかった液体を刷毛で塗られる。
刷毛が液体を塗るひんやりした感覚に、少年の一人はびくりと身震いをした。美しい黒の髪と瞳。透き通るような白い肌。あまりに均整の取れた容貌はどこか作り物じみた印象を見る者に与えた。
何度やってもこの感覚には慣れない、と黒髪少年は思った。

陰茎全体に液を塗られると、それを仕舞うよう言われ、少年たちは従った。
下着の内側で湿った陰部がもどかしく疼き始める。
地獄のような一日の始まりだ。

少年たちは各々教材の入った鞆を持ち、離れた校舎まで向かう。
宿舎と同じように古びた木造の廊下を歩き、時間までに席に着く。

黒髪少年は教室の中央に近い席に座すと、気を紛らわすようにして鞆から一時間目の教

材を取り出した。
授業前だというのに、私語をする者は誰一人としていない。

教員の男が一人教室へ入ってくる。
この学園には、なぜか男性しかいない。

「おはようございます」

男は冷たそうな目を眼鏡の奥で光らせながら言った。
端正な顔立ちが一層冷酷な感じを見る者に与える。

「この後は算数の時間ですが、その前にホームルームを。皆さん知っての通り、今日は媚薬耐性試験の日です。今日一日、皆さんには局部に媚薬を塗った状態で過ごして頂きます。少しでも声を上げたり、射精、その他粗相をするのは禁則事項です。もしも破った場合には一、懲罰房行きです」

懲罰房、という言葉聞いて少年たちの間に張り詰めた空気が満ちる。

「この学園の生徒という誇りを持ち、くれぐれも注意して過ごすように。では、算数の授業を始めます」

男は教材に添って前回の授業の続きを板書し始める。
少年たちもノートを広げ、大人しくそれを書き写している。

この歳の生徒たちにとっては静かすぎることを除けば、一見、そこはどこにでもあるような一般的な男子校の教室だった。
しかし、それはあくまで表層に過ぎない。

少年たちは股間に襲い来る疼きに耐えていた。
ある者は筆記具を持つ手が震え、ある者は熱い息を既に乱しはじめている。

黒髪少年ももじもじと机の下で膝を擦り合わせる。上半身は教師に丸見えなので常に気が抜けないが、下の方ではどうしてもじっとしてられない。

この学園の大人たちが少年たちに教え込みたいのは、勉強でも道徳でもない。
ただただ、将来的に『良い商品』になることだった。

「さ、この問題を、出席番号七番の方にかけて頂きましょう」

男は素知らぬ顔で授業を続けている。

がた、と音をさせて指示を受けた生徒が立ち上がり、黒板へ向かう。
赤みがかった茶髪に透き通った翠(みどり)の目が美しい。

その足取りはどこかたどたどしかった。
黒板に解答を記す手が小刻みに震えている。
おそらく立ち上がっただけでもかなりの刺激が局部に生じたのだろう。激しい運動をしたわけでもないのに、白い肌に滴るような汗が浮かんでいる。

はあ…、はあ……、と吐く息は荒く、解答を書き終える頃には彼の頬はすっかり紅潮していた。

「考え方は間違っていないのですが、途中で計算ミスがありますね。どこだかわかりますか？」

淡々とした調子で男は赤髪の少年に問う。

「う…、えっと……」

解答を書き終え、席に戻れると思っていた赤髪少年は困ったように視線をさまよわせた。

「えっと……、」

その間にも彼の息はどんどん荒くなっていった。
脚はしだいに大袈裟にがくがくと震えはじめ、大きめの瞳に潤いが満ちていく。
他の少年たちは息を詰めてその様子を見守る他ない。

「す、すみません……、わかりませ……っ」

赤髪少年がそう口にした次の瞬間だった。

「う、あ、ああああ……つつつ、」

がくん！と一際大きく彼の腰が揺れた。

下半身をびくびくと小刻みに痙攣させながら、赤髪少年は短い丈の半ズボンの中心に染みを作っていた。その染みは瞬く間に広がり、品のあるグレーの布地を色濃くしていく。ズボンの裾からも、透明な液体がその白い腿や膝を伝って流れていく。失禁だった。

「い、いや…あ！みないで……つつ、あ、ああ…つ、」

そう叫び股間を抑える間にも、液体はとめどなく零れ伝う。

媚薬耐性試験の日にはよくあることだった。

媚薬を塗っただけで、陰部はとてつもない甘い疼きに犯される。少しの刺激でその疼きは増してしまうから、それを避けてトイレに行くのを我慢する者も多い。しかし未発達な躰にそれはあまりにも酷なことだった。

「あ…つ、ああ……つつ、う、」

赤髪少年は股間を押さえたまま泣きながらその場に佇んでいた。

どこからともなく、黒い作業服に身を包んだ男たちが現れる。彼らは赤髪少年の小さな躰を取り押さえ、抱え上げようとする。

「い…っいや…！！」

赤髪少年は思わず抵抗するが、無駄なことだった。

細い体を大人の腕でがっちり捕まえられてしまえば、成す術もない。

赤髪少年はあっという間に担ぎ上げられ、身動きが取れなくなってしまう。

「喘ぎ、放尿の禁則事項に触れた罰として、四年・出席番号七番を懲罰房行きとします」

機械的に作業服の一人が教師に告げる。

「ごめんなさい！！ごめんなさいい……っっ！お漏らししない……っ！もうしないから……あ！！許して……っっ」

泣き叫びながら赤髪少年は懇願するも、聞き入れる大人は誰一人いない。淡々とただ仕事をするだけとでも言うように、極めて事務的な雰囲気の中で彼は連れ去られていった。

「ごめんなさい！ごめんなさいい……っっ！！お願いします、今回は……、今回は見逃してください……っ、」

少年の悲痛な声は彼が廊下に運び出されてからもしばらく聞こえていた。しかし、男たちの足音がやがて廊下の端まで辿り着き鉄の重い扉がガチャンと閉まる音がすると、嘘のように何も聞こえなくなった。

先程よりも濃い緊張の立ち込めた静寂の中、再び授業は再開された一。

「いやああああ……！！！！出して！！出して下さい！！！！」

赤髪少年は泣きながら懇願した。
鉄の重い扉に閉ざされ冷えた部屋にむなしく彼の声が反響する。
男たちは暴れる軀を抑えつけ、無言で少年の手首と足首に鎖のついた枷を嵌める。鎖のじゃらじゃらとした音だけが絶望的に赤髪少年の耳に届く。

「今日一日この部屋で反省するんだな」

男たちはそう言い残すと部屋から出て、外からガチャリと錠を下してしまった。
明かりも無い暗い部屋の中、少年は台の上に寝かされた状態で放置されてしまう。

部屋の奥からのそりと、何かがやってくる。闇に溶け込むようにしてそれはやってきた。
巨漢だった。身長は目の前にある鉄の扉を優に超え、わずかな明かりに浮かび上がる輪郭は全身筋肉の塊だった。一糸をも纏わぬそのシルエットが、少年のか細い腿をがっ！と掴み上げる。

「ひ……ッ！」

物凄い力で脚を左右に広げられる。
怖くて今すぐにも逃げ出したいのに、太ももを強い力で抑えつけられてぴくりとも動けない。

巨漢の獰猛な息遣いが少年の耳を犯した。

「いやっっ！！いやあ……ッ！！！！」

見開いた目からぼろぼろと雫を溢しながら、少年は首を大きく振った。
無駄な抵抗だと分かっているが、本能的な恐怖には逆らえない。
ここに来たのは初めてではないから、これからどんな目に遭うかはわかっている。

「いや！！やめて……っ！！ごめんなさい…っ！ごめんなさいい……っっ！！！！」

少年の言葉など目の前の男の耳には届いていない。
そもそも同言語を解しているのかすら不明なその男は、学園では職員から『淫獣』と呼ばれていた。
彼もまた少年たちと立場は違うながらも、闇の世界の住人達に囚われた哀れな存在なのかもしれない。
しかし、幼い少年にとってはそんなことよりも目の前に迫りくる危機のほうが遥かに重大事項だった。

後孔の窄まりに硬い熱が押し当てられる。

「いや…っ！いや……っっ！！い…、あ！っああ” あ” あ” あ” あ” ああああああ……
っっっっ！！！！！！」

ずん、と一息に凶器的な太さのそれは突き入れられた。
媚薬で多少ぐずついていたとはいえ、大樹の幹のようなそれに貫かれればひとたまりもない。

「あ…あ……っ、」

恐ろしい程の圧迫感が少年を犯す。

息の仕方もわからなくなり、小さな軀を串刺しにされたかのような衝撃に小刻みに軀を震わせることしかできない。

男の長大なそれは、確実に少年の中の奥深く、本来入ってはいけない場所まで分け入った。

これから何時間も、この拷問に耐えなければならないー。

少年はあまりの圧迫感と刺激に白目をむきかけながら、深い絶望を味わった。

一時間目の終業の鐘が鳴り響いた。

ほっと胸を撫で下ろす暇もなく、黒髪少年たちは体操服に着替えさせられ、校庭へと向かう。

一時間目では一人しか脱落者が出なかった。しかし、二時間目が体育となるとここでかなりふるい落とされることが容易に想像できた。

というのもー

「お前たち！ さっさと並べ！！ 今日には鉄棒運動だ！」

校庭に着くと、大柄の体育教師が例のごとく待ち構えていた。

校庭の砂の香りが森に芽吹きはじめる春の香りを運んでくるが、体育教師の扱きはそれらに浸る余裕を少年たちに与えない。

一通り準備運動と軽いジョギングをさせられた時点で、少年たちは皆一様に息を荒げていた。動いたことで血液の巡りが良くなって、媚薬を塗られた箇所が余計に疼き出す。

「今回マスターする技は『プロペラ回り』だッ！ 今から手本を見せるから、よく見て覚えるように！」

教師の実演の後(のち)、少年たちは鉄棒に跨(またが)るよう指示される。

この技は名前の通り、鉄棒に跨った姿勢を起点としてそのまま軀を横倒しにして一周し、元の真っ直ぐに跨った状態に戻ってくるという、プロペラの動きを模した技だ。

少年たちの股間を鉄の硬い棒が苛(さいな)む。